

# スティーヴィー

2006(平成18)年3月1日鑑賞(東映試写室)

★★★★



監督・製作・編集＝スティーヴ・ジェイムス／製作総指揮・プロデューサー・撮影＝ゴードン・クイン／出演＝スティーヴィー・フィールディング／ヴァーナ・ハグラ／パニース・ハグラ／ブレンダ&ダグ・ヒッカム／トーニャ・グレゴリー (ムヴィオラ配給/2002年アメリカ映画/145分)

……スティーヴィー少年のビッグ・ブラザーであったスティーヴ・ジェイムス監督が、10年後に再会した時、スティーヴィーは24歳。既に前科10犯を重ねていたうえ、撮影中には、少女に対する性的虐待容疑によって逮捕……。そんな現実の事件を含めて、監督はスティーヴィーとどう向き合ってドキュメント映画を完成させるのだろうか？ またその是非、功罪は？ あまりにも重いテーマで答えは出せないものの、考えさせられることがいっぱい……。

## スティーヴィー・フィールディング少年とスティーヴ・ジェイムス監督

この映画のタイトル『スティーヴィー』とは、現実に生きている人間の本名。つまりこの映画は、スティーヴィーの半生を、その「ビッグ・ブラザー（兄役の制度）」になったスティーヴ・ジェイムス監督が、ドキュメント映画として描いた「問題作」。監督がはじめて11歳のスティーヴィー・フィールディング少年と出会い、その更生を助けるためのビッグ・ブラザーになったのは1980年代で、監督が南イリノイ州立大学在学中のこと。その数年後、監督はシカゴへ引っ越したため、ビッグ・ブラザーの役目を終えたが、1995年に監督がイリノイ州南部へ戻り、スティーヴィーとの再会を果たした時、監督はスティーヴィーを題材とするドキュメント映画の製作を思いついたというわけだ。当然それはスティーヴィーの了解の上だったが、それがこんな大作になるとは、監督自身も予想していなかったこと……。

## スティーヴィーの子供時代の環境は？ スティーヴィーの人物像は？

スティーヴィーは私生児で、母親は彼が生まれてくることを望まず、子供の彼を痣ができるまで殴り続けたとのこと。そしてスティーヴィーが幼い頃、別の男と結婚し、スティーヴィーを義理の祖母に引き渡し、「この子はいらぬ」と言い捨てたということ。また母の住む家は、義理の祖母の住まいのすぐ隣だったようだ。そんなスティーヴィーは少年時代を、イリノイ州南部のポモーナという小さな村で惨めで荒れた暮らしを送っていたとのことだ。

## 24歳の青年スティーヴィーの人物像とその映画化の狙いは？

1995年にスティーヴ・ジェイムス監督が再会した時のスティーヴィーは24歳になっていた。13歳の時に監督と別れたスティーヴィーは、既にさまざまな犯罪で10回以上の逮捕歴を持っていたとのこと。しかし、それはそれで仕方がないこと、人にはそれぞれの人生があるのだから……。

しかし、そんなスティーヴィーを監督がフィルムに収めようと考えたのは、一体何のため……？ それについて監督はパンフレットの中で、「自分自身や他の人がこの10年間出来なかったこと、つまり『スティーヴィーを理解』したいと思った」「私個人のレベルでは、彼のビッグ・ブラザーとしてスティーヴィーに手を差し伸べてやる事が出来なかった自分の失敗を償う行為として、この映画を作りたかったのだと思う」と書いているが、さてその是非、功罪は……？

## 意外な展開の中、悩みは深く大きく……

1997年、スティーヴィーは親族の少女への性的虐待容疑で逮捕された。これは映画の世界の話ではなく、現実の世界の話だ。スティーヴィーはその容疑について否認し、国選弁護人をつけて争うことになったが、こんな現実の事件をすべてそのままカメラに収めることなどできるはずがない。またスティーヴ・ジェイムス監督自身がこの容疑をシロと考えるのか、それともクロと考えるのかによって、その取り扱いが大きく変わるのも当然。そして最終的には、どこまでドキュメント映画として残し、どこでどう発表するのかについて、監督の悩みは、どんど

ん深く大きくなっていったはず……。

## ブレンダとトーニャの位置は？

この映画にはスティーヴィーの友人が1人も登場しないが、それはきっと現実  
に友人など1人もいないから……。しかし、スティーヴィーには彼の人生に大き  
な影響を与えた2人の女性がいた。第1は2歳年下の義理の妹のブレンダ。ブレ  
ンダはスティーヴィーほど母親からの虐待を受けていなかったらしいが、彼女の  
存在はスティーヴィーにとって、身の回りの世話をしてもらっていたという以上  
に大きかったはず。このブレンダが結婚し、1999年に妊娠したことによってステ  
ィーヴィーはいかなる影響を受けたのだろうか……？

第2は、恋人というより婚約者に近い女性のトーニャ。彼女は身障者だが、ス  
ティーヴィーはトーニャの言うことだけには素直に耳を傾けていた。果たしてそ  
れはなぜなのか……？ そしてトーニャはスティーヴィーをターゲットとしたこ  
のドキュメント映画をつくることについて、どのように評価していたのだろうか  
……？

## 『鉄西区』と『スティーヴィー』

この『スティーヴィー』は2002年のアメリカ映画で、日本では「山形国際ドキ  
ュメンタリー映画祭2003」で上映され最優秀賞を受賞し、その2年後ようやく日  
本で公開されるに至ったとのこと。私が面白いと思ったのは、この映画祭で『ス  
ティーヴィー』を上回る大賞をとったのが中国映画の『鉄西区』だったというこ  
と。これは3部構成で上映時間が合計9時間5分という超大作だから、鑑賞する  
のは大変だったが、「これぞドキュメント映画！」と感心させられた作品（『シネ  
マルーム5』369頁参照）。

『スティーヴィー』も2時間25分と長い映画だが、この映画の中でいろいろと  
示すスティーヴ・ジェイムス監督の問いかけは、あまりにも重いもので、軽々し  
く答えが出せるものではない。監督は、自分の無力さを痛感しながらこの映画を  
つくっているはずだと私は思うのだが、さてあなたはスティーヴ・ジェイムス監  
督の気持をどう理解する……？

## パンフレットの勉強が不可欠

パンフレットには、このドキュメント映画が日本で公開されるにあたって、2005年11月時点での製作総指揮のゴードン・クインとスティーヴ・ジェイムス監督の言葉が紹介されている。これがどこまで本音を語ったものかはわからないが、少なくとも彼らがこの映画を製作・監督することの是非、そしてそれを公開することの是非について、かなり悩んでいたことを読み取ることができる。カウンセリングをやっているというスティーヴ・ジェイムス監督の奥さんもスクリーン上に何回か登場し、その主義主張や考え方はかなり明確だが、それは多分スティーヴィーには受け入れられないはず。また監督自身も、スティーヴィーは有罪だ、スティーヴィーはどうしようもない奴だと何度も見放したはず……。そんな人物を主人公にして、ここまでのドキュメント大作をつくり、公開したスティーヴ・ジェイムス監督の気持を理解するためには、このパンフレットに書いてある彼らの説明を勉強することが不可欠だろう……。

2006(平成18)年3月4日記

### ミニコラム

#### 中国第六世代監督への期待

『ココシリ』(04年)の陸<sup>ルー・チュウアン</sup>川監督は、張<sup>チャン・ユアン</sup>元、賈<sup>ジャ・ジャンクー</sup>樟柯らと並ぶ第六世代監督の1人。06年6月14~16日付朝日新聞は「中国電影100年」を特集したが、そのテーマの1つは「政治の風」。中国ではラジオ・映画・テレビ総局の事前審査をパスしない限り、映画の撮影や放映はできない。そんな中、今年5月のカンヌ国際映画祭で話題を呼んだのが婁<sup>ロウイェ</sup>燁監督の『頤和園』。しかし、これは男女の性愛描写が多く、89年の天安門事件やベルリンの壁崩壊

など中国の政治的タブーに触れるため、当局の許可のないゲリラ的出品だった。また、世界的注目をあびた賈<sup>ジャ・ジャンクー</sup>樟柯の『一瞬の夢』(98年)、『プラットホーム』(00年)、『青の稲妻』(02年)も国内では上映禁止処分に。第六世代監督にはそんな作品も多い。しかし、彼らには勇気を持って、現在タブーとされている文化大革命や天安門事件を取り上げ、真実の中国の姿を描いてもらいたいものだ。

2006(平成18)年8月16日記